古屋安雄著『日本のキリスト教』

（教文館、２００３年、２８２頁）

西原廉太（立教大学文学部助教授
立教学院史資料センター研究員）

「日本のキリスト教」とはいったい何であったのか。あるいは今後、何であろうとするのか。これは、キリスト者であるかどうかに関わらず、日本において多少なりともキリスト教に触れる者が必ず抱くことになる問いであろう。なぜ日本のキリスト教人口は、一パーセントを越えることがないのか。ほぼ同時期にキリスト教が伝えられた隣国の韓国では、実に三割以上の国民がキリスト者であり、キリスト教の社会的影響力はそれ以上である。ここ数代、韓国の大統領にはすべてキリスト者が選ばれている。この違いはなぜ生じたのか。我が立教学院も創立一三〇周年を迎えている。創立者であるウィリアムズ主教は、この学校が「日本のキリスト教」の初穂となり、その穂波がいずれ豊かに実ることを夢見ながら隅石を据えたはずである。一三〇年が経った今、「キリスト教に基く人間教育」の看板は学校案内やシラバスの一頁目にしっかり登場するが、キャンパス内でキリスト者の学生、教職員に出会う確率は、多摩川の河原で四葉のクローバーを探し当てるのとさほど変わらない。これはいったいどのような事態なのか。

この問いに歴史的な角度をはじめとして、さまざまな視点から迫るのが本書、『日本のキリスト教』である。『日本のキリスト教』という壮大な題にも関わらず、内容、分量共に大変読みやすいものとなっている。神学や教会史の専門知識を読者に要求することはない。その証拠に、初版が出されて半年ほどで早くも再版発行となった。出版業界全体が不況下にある昨今であるが、キリスト教関連書籍の売れ行きの悪さは深刻で、五百冊も出ればベストセラーである。そうした中、本書がこれほどまでに刷られているというのは、その題目に十二分に応答し得る内容が与えられている、紛れもない証左であろう。

著者、古屋安雄氏は一九二六年生まれ。長年、国際基督教大学で教えられたが、その間にプリンストン神学大学などでも客員として教鞭をとられている。日本基督教学会でも中心的な役割を果たされ、いわば日本キリスト教界の重鎮である。本書は氏のさまざまな論文や講演をもとに構成されており、必ずしも一冊の書物としての統一性はないが、全体を読み通すことによって、著者の独自的な日本キリスト教論の視点が浮かびあがってくる。

古屋氏の興味深い指摘は、まず、基本的に日本のキリスト教は「武士道」に接木されたものであると捉える点

にある。武田清子らの先行的考察と対話しながら、氏は、武田が新渡戸稲造のキリスト教と武士道の結びつきを強調したことについて、新渡戸の著作をていねいに分析しつつ、必ずしも新渡戸にとって武士道は積極的意味を持ち得ていないことを明らかにする。一方で、著者は、武士道にキリスト教を接木すべきと主張したのは、武田が対決型の代表者であると見なしている内村鑑三にほかならないと論じる。武田がそもそも「峻烈なる洞察」と呼ぶ内村のそれは、武士道と結びついたキリスト教から来たものである、と言う。したがって内村に指導された「無教会」主義の根底にはこの武士道が脈々と流れていることは間違いないが、無教会のみならず日本のキリスト教には多かれ少なかれ武士道的エッセンスが注入されているという古屋氏の論は非常に説得的ではある。

著者はさらに、日本のキリスト教がほぼ共通に保持しているある種の「真面目さ」「堅苦しさ」「知識中心主義」といった傾向はこの武士道的影響と無関係ではないと指摘する。また、戦前、特に戦時中の、教会、無教会を問わず、わが国のキリスト教が軍国主義ないしは国粋主義と結合した一因に、この武士道とキリスト教の結びつきがあったのではないか、という視座は、日本のキリスト教界の戦争責任の問題を考える上でも興味深い視座である。確かに、武田の議論をはじめ、これまでの日本キリスト教史における武士道の影響の評価については、概して肯定的なものが多かったように思う。二十一世紀における日本のキリスト教が、知識階級の一部だけに受容されたものではなく、一般大衆あるいは民衆の間に受け容れられるものになるためには、「武士道」ではなく「平民道」と結びついたキリスト教とならなければならない、とする古屋氏の主張は傾聴に値しよう。私自身は、「平民道」ではまだだめで、周縁化され排除された民衆の視点にまで神学的にも実践的にも降りていかない限り、日本のキリスト教会の再生はありえないと考える。その意味で、本書が植村や内村は論じていても、例えば田中正造や渡辺誠などに焦点を当てていないところには不満が残る。

その他、トレルチなどの方法論を用いた無教会における神秘主義性の分析や、羽仁もと子論、賀川豊彦論もそれぞれ新鮮で、現代的意義が適確に引き出されている。日本カトリック教会や日本の福音派についての論考もあるが、日本のエキュメニカル的ヴィジョンを語るには、現下の世界レヴェルにおける教会間対話の劇的な進展を鑑みても、聖公会やルーテル教会への言及がほぼ皆無であるのは残念であった。

いずれにしても、本書が、私たちがこれからの「日本のキリスト教」を語っていくための良い道標であることは論を待たない。ご一読をお薦めしたい。